法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

能楽研究所彙報(昭和53年4月～55年3月)

(雑誌名 / Journal or Publication Title)
能楽研究 : 能楽研究所紀要
(巻 / Volume)
5
(開始ページ / Start Page)
151
(終了ページ / End Page)
164
(発行年 / Year)
1980-11-10

能楽研究所彙報（昭和53年4月～55年3月）

〔観世寿夫記念法政大学能楽賞〕

設定までの経緯

別報の如く、能界のホープであった観世寿夫氏が53年12月7日に亡くなられたが、能界と学界をつなぐ位置にあって、能楽研究所とも縁の深かった氏の急逝は、研究所にとっても大きな痛手であった。謹んで氏の御冥福をお祈りする。

ところで、寿夫氏の七週忌明にあたる54年1月24日に観世弘子夫人が来所され、香奠の一部を能楽研究に役立てていただきたいとの御趣旨で、能楽研究所に対して金百万円の御寄附を寄せられた。弘子夫人のみならず、寿夫氏の御遺族・近親者御一同の一致した意向に基づく御芳志の由であった。

能楽研究所は、そのことを法政大学理事会に報告し、有効な使途について相談した結果、法政大学が別に九百万円を拠出し、寄附金と合わせた一千万円を基金として、観世寿夫氏の業績を記念する賞を設定することになり、五月下旬の理事会に於いてその事が承認された。事務的な処置などを経て、六月中旬に総長名義の左の文書を関係方面に発送したが、賞の設定の経緯と趣旨がそこに明記されているので、全文を転載しておく。

「観世寿夫記念法政大学能楽賞」設定のお知らせ

冠省

シテ方観世流の能役者観世寿夫氏は、稀有の天分と不断の努力とによって清新・華麗な芸風を体得し、戦後の能界を代表する演能活動を展開する一方、ギリシャ劇の上演や現代演劇への出演によって日本の演劇界に新風を吹き込み、能の海外公演に参加して外国芸術家と交流するなど、多彩な活動で知られるすぐれた演劇人でした。氏はまた、みずから世阿弥や能面に関する研究的著述を発表しておられるほどで、能楽の学問的研究に深い関心を寄せ、野上記念法政大学能楽研究所の研究活動を積極的に支援し、その成果を活用してもおられました。

その観世寿夫氏が昨年十二月七日に亡くなられました。享年五十三歳、文字通りの早世であり、能界・劇界の一大損失であるのはもとより、学界にとってもかけがえのない人材を失ったのであり、大きな打撃でした。哀惜の情、今も尽きることがありません。

然るところ、故人の七七忌明にあたる本年一月二十四日、御遺族観世弘子氏より、葬儀に際して各方面から寄せられた御芳志の一部を故人が深い関心を寄せていた能楽研究に役立てたいとの御趣旨によって、法政大学能楽研究所に金百万円の御寄附がありました。

法政大学は、右の寄付金の用途について、観世寿夫氏の比類ない業績を記念する永続的な形での活用形態を考究した結果、寄付金に法政大学が拠出する分を加えたものを基金とし、それに基づいて、能楽研究及び故人が関与された分野に於いて顕著な業績をあげた個人または団体に賞を贈ることが適当であるとの結論に達し、本年度より、左記のごとき賞を設定することにいたしました。

記

〔賞の名称〕観世寿夫記念法政大学能楽賞

〔授賞対象〕

1　能楽の研究・評論に顕著な業績をあげた人（またはグループ）

2　顕著な舞台成果をあげた能楽師（または団体）

3　能楽の普及活動、能楽と他の芸術分野との交流などに顕著な業績のあった人（または団体）

〔賞金〕二十五万円（一人または一団体）

〔選考方法〕

。法政大学が選考委員若干名を委嘱する。

。選考委員は、各方面に該当者の推薦を依頼し、それに基づいて、年一回、二名（または団体）以内の受賞者を選ぶ。

。選考結果は十一月中に発表し、故人の命日たる十二月七日前後に授賞式を行う。

（本年度の選考委員）増島宏・横道万里雄・広末保・古賀照一・表章

以上、「観世寿夫記念法政大学能楽賞」設定の経緯と趣旨を御報知申し上げました。同賞につきまして、今後何かと御協力を賜わりたく、あわせてお願い申し上げます。

敬具

昭和五十四年六月

法政大学総長　中村　哲

関係者各位

若干補足すれば、受賞者の二名は、研究者なり舞台人なりに片寄らない形にすることが原則とされるはずである。受賞者二名の場合は勿論各自に25万円の賞金が贈られる。

当初理事会に相談をした時には、こうも順調に事が運ぶとは予想していなかったが、観世寿夫氏の早世が新聞などで大々的に報じられ、氏の業績について理事各位が熟知しておられたことが、大きく影響したように思われる。故人の遺徳の然らしむるところと言うべきであろう。

第一回受賞までの経緯

法政大学が新たに設定した右賞の54年度選考委員を委嘱された増島宏(法政大学学務理事)・横道萬里雄(東京芸術大学教授)・広末保(法政大学文学部教授)・古賀照一(同第一教養部教授)・表章(同能楽研究所員)の五氏は、増島氏を委員代表に選び、10月上旬に、能・演劇・音楽の研究者・評論家など約百氏に左記の推薦依頼状を発送し、受賞候補者の推薦をお願いした。（原文横書）

昭和54年10月10日

各位

観世寿夫記念法政大学能楽賞選考委員代表　増島　宏

「観世寿夫記念法政大学能楽賞」候補者推薦のお願い

謹啓　爽秋の候、ますます御清栄のこととお喜び申し上げます。さて、法政大学は同封別紙のごとき趣旨のもとに本年6月に観世寿夫記念法政大学能楽賞を設定いたしましたが、その第一回授賞を本年12月上旬にひかえ、受賞者選考の資料として各方面の識者に候補者の推薦をお願いすることにいたしました。

つきましては、御多忙中まことに恐縮でございますが、研究者・能楽師、その他能楽に関係ある分野で活動なさった方で、本賞の候補にふさわしいとお考えの人（または団体）を、11月8日までに、同封の推薦用紙によって御推薦下さいますよう、お願い申し上げます。なお、選考は大よそ下記の方針に従いますので、御参照の上御推薦いただければ幸甚でございます。

。授賞の対象となる業績や成果は、ここ二・三年間のものを主体とし、物故者は没後満一年以内の人のみを対象とする。（本年は第一回なので、少し幅を広げて考える。）

。芸術院会員・人間国宝など、すでに国家的顕賞を受けておられる人は対象から除く。

各位からの御推薦の結果に基づきまして、11月中旬に予定しております選考委員会に於いて慎重に審議の上で受賞者を決定する所存ですので、よろしく御協力を賜わりますよう、重ねてお願い申し上げます。

敬具

（同封した推薦用紙は、二名の候補者について、氏名・住所と推薦理由、及び推薦者の氏名を記す形のもの）

右の依頼に応じて11月8日までに返信を寄せられた方は、無記名の分を含めて45名で、約半数であった。研究者・演技者各1名を推薦された人よりもいずれか一方で2名を推薦された人が多く、1名だけの人や、グループではなくて4名を推薦された人もあった。被推薦者は、研究または評論の業績による人が16名、顕著な舞台成果による人が18名と二団体、それ以外の業績による人が2名と一団体で、かなり広範囲にわたった。

11月15日に、選考委員会が開かれ、委員五氏が推薦された候補者について慎重に審議した結果、故香西精氏と白石加代子氏を第一回受賞者に選んだ。それに基づき、11月22日付、総長名義で各方面に受賞者決定の旨を報知する文書を発送したので、その全文を転載しておく。（原文横書）

昭和54年11月22日

各位

法政大学総長　中村　哲

「観世寿夫記念法政大学能楽賞」受賞者決定のお知らせ

謹啓　晩秋の候、いよいよ御清栄のこととお喜び申しあげます。さて、法政大学は本年6月に「観世寿夫記念法政大学能楽賞」を設定いたしましたが、各方面の識者にご推薦いただきました候補者について、選考委員（増島宏・横道萬里雄・広末保・古賀照一・表章）が慎重に選考した結果に基づき、第一回の受賞者を下記の二氏に決定しましたので、御報知申しあげます。

○〔受賞者〕香西　精（こうさい・つとむ）氏

〔授賞理由〕…多年にわたって世阿弥や能に関するすぐれた論考を発表し続け、能楽研究を大きく進展させた。晩年の論考の集成たる『世子参究』（本年11月、わんや書店刊）も、卓越

した研究成果である。

○〔受賞者〕 白石加代子(しらいし・かよこ)氏

〔授賞理由〕…昭和49年から53年にかけて、「トロイアの女」「バッコスの信女」などで能役者観世寿夫と共演し、伝統芸能と現代劇の接点を演技表現を通して明らかにした。

なお、授賞式は12月7日午後6時より、九段会館に於いて（国際シンポジウム「世界の中の能」終了後のレセプションの席上で）行います。

以上、お知らせしますと同時に、同賞につきまして今後もよろしく御協力を賜わりますよう、お願い申しあげます。

敬具

〔参考〕 受賞者二氏の主な経歴

○香西　精…明治35年生れ。岡山県出身。東京大学文学部英文学科卒。昭和4年甲南高校教授となるも、病気のため同8年に退職。17年に実業界に入り、35年に兵庫米穀株式会社社長となる。52年同会長となり、本年1月12日死去。76歳。昭和初年から世阿弥や能についての論考を発表し、戦後は、世阿弥と禅の関係の究明など、専門の研究者も及ばぬすぐれた業績によって能楽研究をリードし続けた。著書に、『世阿弥新考』(37年、わんや書店)、『続世阿弥新考』(45年、同)、『能謡新考』(47年、檜書店)があり、45年には神戸新聞平和賞・兵庫県文化賞を受賞。晩年は失明に近い状態にありながら研究を捨てず、週に一度、ハガキ一枚の小論文を法政大学能楽研究所表章氏に発信し続け、三年余、168通に及んだ。それが遺著『世子参究』の主体である。

○白石加代子…東京都出身。劇団早稲田小劇場所属の女優。昭和42年に同劇団に入団。45年から翌年にかけての早稲田小劇場の公演「劇的なるものをめぐってⅡ」の演技によって、演劇界のみならず各界に注目される。47年にジャン・ルイ・バロー主宰の世界演劇祭(パリ)に能の観世寿夫・栄夫兄弟や狂言の野村万作と共に参加し、以後5回にわたって欧米の演劇祭に招待される。昭年49年から始まった岩波ホール演劇シリーズでは、第一回の鈴木忠志演出「トロイアの女」では王妃ヘカベを(共演者、観世寿夫・市原悦子)、第二回の武智鉄二演出「東海道四谷怪談」ではお岩を(共演者、中村扇雀)、第三回の鈴木忠志演出「バッコスの信女」ではペンテウスとその母アガウエを(共演者、観世寿夫)演じ、一貫して主役を勤めている。

授賞式は、予定通り、12月7日午後6時から、九段会館で、国際シンポジウム「世界の中の能」終了後のレセプションの冒頭に行われた。この日はちょうど観世寿夫氏の一周忌の日であり、弘子夫人や観世銕之丞氏御夫妻など故人の関係者も列席して下さった。増島宏選考委員代表の選考経過報告の後、中村総長から、故香西精氏代理の香西泰氏(御二男)と、白石加代子氏に、賞状と賞金が授与され、列席者一同から拍手で祝福を受けた。授賞式終了後に、授賞披露パーティーを兼ねた形のレセプションに移り、歓談に時を移して、午後8時半に散会となった。

以上、「観世寿夫記念法政大学能楽賞」設定の経緯と第一回授賞までの経緯を、記録をかねて詳細に報告した。この賞は法政大学が設定した賞であり、能楽研究所の直接の業務ではないが、設定の経緯からも、能楽研究所が事務的な面の多くを担当した。今後も同じ形が続くものと予想され、授賞までの経過もこの欄で報告してゆくつもりである。

〔国際シンポジウム「世界の中の能」〕

法政大学が主催する第四回目の国際シンポジウムが、〝世界の中の能〟をテーマに、54年12月6・7日の両日にわたって開催された。このシンポジウムは能楽研究所の主催ではなく、能楽研究所が開催を大学側に働きかけたわけでもないが、九名の運営委員（委員長増島宏、委員表章・片桐登・金丸十三男・黒川欣映・古賀照一・西野春雄・広末保・矢内原伊作）に所員三名が参加して企画にあたり、事務的な面も法政大学国際交流センターと能楽研究所が協力して処理し、結果的には能楽研究所の仕事と同然であったので、ここに概要を報告しておく。

このシンポジウムの趣旨は、各方面に送付した案内のパンフレットに印刷した如く、次のようなものであった。

創立百周年を迎え、学内に能楽研究所を持つ法政大学が、日本の古典演劇である能についての、国内・国外の研究者や演劇人による国際シンポジウム〝世界の中の能〟を開催いたします。長い伝統を持ち、独自の様式や演劇性によって世界的な注目をあびている能、及びその研究は、あいつぐ名手や研究者の死去、国立能楽堂設立問題の具体化などによって、今や重大な転換期を迎えています。そうした時に、能の今後のあり方や研究の方向を世界的視野で見さだめる一助として、今回のテーマを設定しました。

討論の素材として、鉄仙会（てっせんかい）や早稲田小劇場の協力を得て、能の上演や前衛劇の演技参加も行われます。これらによって能の楽劇としての特性や現代演劇とのかかわりについて考究しつつ、発表者と一般参加者が一体となっての、みのり多い話し合いが展開されることを期待しています。

プログラムは次の通りで、第一日は能とその研究を中心に、第二日は能と内外の現代演劇の関わりを主体にしたものである。

〔第一日〕　十二月六日（木）　九時三十分～六時　九二〇番教室

開会挨拶　総長　中村　哲

プログラム説明　会議運営委員長　増島　宏

報告及び討論　司会　黒川欣映・片桐　登

報告（A）〝能とその研究の現状と展望〟　表　章

報告（B）〝フランスで能楽を研究する意義〟　パリ東洋言語研究所教授　R・シフェール

討論①〝能楽研究の方向〟　前筑波大学教授　小西甚一
東京大学教授　小山弘志
上智大学教授　T・イモース
報告者及び一般参加者

――――――――（以下は矢来能楽堂）

報告（C）〝能の特質――通小町に即して――〟　東京芸術大学教授　横道万里雄

演技1　能「通小町」
シテ四位少将の霊　観世静夫・ツレ小町の霊　浅見真州他
演技2　舞囃子「天鼓」弄鼓之舞　観世栄夫他
討論②〝能の特質をめぐって〟　報告者・演技者・一般参加者

〔第二日〕十二月七日(金)九時三十分～五時十分　九二〇番教室
報告・実演・討論　司会　広末　保・古賀照一
報告(D)〝現代演劇に与えた能の影響〟
1〝現代の演劇と能〟　東京大学教授　渡辺守章
2〝イエーツを中心に〟　東京大学教授　高橋康也
3〝創作者の立場から〟　劇作家　木下順二
報告(E)〝外国の演劇人から見た能〟
1〝アメリカ演劇と能〟
ニューヨーク大学教授　R・シェックナー
2〝能とヨーロッパ演劇〟
デンマーク・オーディンテアトレット演出家　E・バルバ
報告(F)及び実演〝能と前衛劇〟早稲田小劇場演出家　鈴木忠志
(演技参加　早稲田小劇場及び観世栄夫)
討論③〝能と現代演劇〟　報告者及び一般参加者
閉会挨拶　増島　宏

両日ともに参加者は三百名を越え、参加申込みをお断りせざるを得ない状態であった。会議の使用言語は日本語及び英語で、同時通訳と逐語通訳が併用された。一般の参加者からは二千円の参加費を頂戴した。

第二日の行事終了後、午後六時から九段会館で関係者・招待者によるレセプションが開かれ、その冒頭に別記した如く観世寿夫記念法政大学能楽賞の授賞式が行われ、その後谷川徹三元総長の乾盃で祝宴に入り、八時過ぎに終了した。

理事者側から能楽研究所主体のシンポジウム開催の話が持ち込まれたのが年度内に入ってからであり、一旦は準備期間不足を理由に固辞したものの、諸般の事情から開催に踏み切ったのが実情であったが、報告者や銕仙会・早稲田小劇場をはじめ多くの方がたの積極的な御協力によって、大過なく終えることができた。厚く御礼申し上げる。

なお、このシンポジウムの報告・討議の内容等は、法政大学が単行本の形の報告書を作るべく作業を進めている。また雑誌『法政』55年1月号に西野所員が概要を報告してあり、表所員の報告の内容も同誌に掲載されている。

〔能楽資料集成の発行〕

わんや書店と提携して昭和48年から継続刊行している「能楽資料集成」は、既刊の七冊に続いて左の二冊を刊行した。

『法音抄Ⅲ』(昭和53年5月30日発行)第8回配本
謡曲注釈書『法音抄』巻五の影印(オフセット印刷)と、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲに分冊した同書全体の索引、及び解説を収め、校訂は西野春雄所員が、索引・解説は表章所員が担当した。B6版、二七〇頁。会員頒価二五〇〇円。なお、『法音抄』の著者恵空の伝記については本冊の解説に詳述する紙幅がなく、表所員が別に「恵空伝補考」と題する論考(『中田祝夫博士退官記念国語学論集』所収)を発表している。それをも参看されたい。

『金春安照伝書集』(昭和53年12月20日発行)第9回配本。表章所員と小田幸子氏(法政大学大学院博士課程終了)の校訂・解説。表所員が発見して昭和45年に学界に紹介した中村健次郎氏蔵の文書の内、同家の家祖たる中村勝兵衛が金春大夫安照から相伝された伝書二種(『金春安照秘伝書』一冊・『金春安照能伝書』三冊)、及び勝兵衛の子の中村正辰の手に成る二種の伝書を翻印し、解説と索引を附した。B6版二七八頁。会員頒価二五〇〇円。なお、解説に収めきれなかった金春安照伝書の諸問題については、『中世文学』23号(中世文学会発行)に小田幸子氏が「金春安照の能楽論」と題して論考を発表している。それをも参照されたい。

〔紀要「能楽研究」の発行〕

昭和53年7月31日付で研究所紀要『能楽研究』の第四号を発行した。A5版二一六頁で、内容は次の通りである。

大和猿楽の「長」の性格の変遷(下)……表　章　一
天女舞の研究……竹本　幹夫　九三
寛永年間の勧進能……古川　久　一五九
研究展望(昭和51・52年)……西野　春雄　一七一
能界展望(昭和51・52年)……片桐　登　一八三
観世新九郎家文庫目録(下)……二〇七

なお、紀要の二・三・四号には残部があり、希望者に実費で頒布している。第四号は送料とも一五〇〇円

〔所員研究業績〕

表　章

『法音抄 Ⅲ』(能楽資料集成8) 解説　わんや書店　53・4
『日本庶民文化資料集成 第三巻 能』 伊藤正義・中村保雄氏と共同編集　三一書房　53・6
『別冊太陽 25 能』 構成と解説　平凡社　53・11
『風姿花伝影印三種』 校訂・解説　伊藤正義氏と共著　和泉書院　53・12
『世子参究』(香西精著) 編集・補説　わんや書店　54・11
『能楽史新考(一)』　わんや書店　54・12
能概説　『日本庶民文化資料集成 第三巻 能』　同　右　53・6
薪能番組 校訂(中村保雄氏と共同)と解説　同　右　53・6
享保六年書上 校訂と解説　同　右　53・6
大和猿楽の「長」の性格の変遷(下)　能楽研究4号　53・7
能楽研究の現状と展望(上・下)　観世8・9月号　53・8・9
能の歴史　『別冊太陽 25 能』　53・11
喜多流ツレ日向家小考(上・中・下)　喜多53年秋冬号、54年春号　53・9、54・3
恵空伝補考　『中田祝夫博士退官記念国語学論集』　54・3
世阿弥の「道」と「芸道」　創文4月号　54・4
〈砧〉の能の廃絶と中興　観世10月号　54・10
世阿弥以前　国文学1月号　55・1
能とその研究の現状と展望　法政1月号　55・1
江戸初期の「仕舞」(上)　観世3月号　55・3

西野春雄

放下僧、古今あり〈研究・十二月往来27〉　銕仙262号　53・4
式楽と家元制度　歴史公論4月号　53・4
『法音抄Ⅲ』〈能楽資料集成8〉校訂　53・5

素謡世々之蹟 校訂解題『日本庶民文化資料集成第三巻 能』 53・6
成立期の能と狂言—成立前夜の所見二、三 国文学6月号 53・6
世阿弥〈古典作家の肖像〉 解釈と鑑賞7月号 53・7
研究展望（昭和51・52年） 能楽研究4号 53・7
作品研究「紅葉狩」 観世11月号 53・11
世阿弥・幽玄の思想 別冊太陽・冬 53・11
面・装束・舞台の変遷 別冊太陽・冬 53・11
口頭発表謡曲改作史の一断面—千手をめぐって— 中世文学会 54・6
『能楽全書』綜合新訂版 第一巻・能の思想と芸術 解題補注 54・7
九州大学附属図書館所蔵 自家伝抄（一）（翻刻紹介） 能研究と評論8号 54・10
世阿弥の作劇法—能作の流れのなかで 国文学1月号 55・1
作品研究「鶴亀」 観世1月号 55・1
〔報告〕第四回国際シンポジウム 世界の中の能 法政1月号 55・1

片桐登

宝生座の歴史稿 近世初期の宝生座を中心に(二)〜(六) 宝生4 5 8 10 11月号 53・4 5 8 10 11
仙助座一件留 解題校訂『日本庶民文化史料集成 第三巻 能』 53・6
堀井仙助辻能番組 堀井座天尓波態格 解題校訂 同 右 53・6
能界展望（昭和51・52年） 能楽研究4号 53・7
能はよきと申事 銕仙264号 53・10
江戸の庶民生活と能 『別冊太陽 25 能』 53・11
宝生座の歴史稿 近世初期の宝生座を中心に(七)〜(十) 宝生6 9 10 11月号 54・6 9 10 11
細川氏と小笛(一)(二) 宝生12・1月号 54・12、55・1
手猿楽虎屋資料補遺 宝生2月号 55・2

古川久

明治初年の金剛舞台番組(一)〜(七) 金剛101〜108号 53・5〜55・5
寛永年間の勧進能 能楽研究4号 53・7
近世の能楽史を 季刊邦楽16号 53・9
宝生知栄と金剛舞台 宝生7月号 54・7
明治初年の観世流と金剛舞台 観世8月号 54・8
芝能楽堂の番組(一)〜(六) 能楽タイムズ330〜335号 54・9〜55・2
能の小町 大法輪11月号 54・11
国劇の誕生—能楽の成立と展開— 中央評論149号 54・11

竹本幹夫

シラバヤシ考 国文学研究65集 53・6
猿楽伝記 解題校訂『日本庶民文化史料集成 第三巻 能』 53・6
天女舞の研究 能楽研究4号 53・7
夢幻能の前場に関する覚え書 銕仙264号 53・10
一噌流系笛伝書『矢野一宇聞書』翻刻・解説（三宅晶子氏と共同） 『中世文学資料と論考』 53・11
能作者列伝 『別冊太陽 25 能』 53・11
世阿弥の言葉より 同 右 53・11
能楽史年表（表章氏と共編） 同 右 53・11
〈作者付〉と宮増をめぐって 能研究と評論8号 54・10
作品研究「竜田」 観世11月号 54・11
花鏡—舞は声を根と為す 国文学1月号 55・1
〈鵜祭〉小考 銕仙273号 55・1
非所演曲書上小考 日本古典文学会々報78 55・1
素囃子の変遷(一) 銕仙275号 55・3

〔雑　報〕

所長の交替

文学部長の兼務を原則とする当研究所の所長は、文学部長の交替に伴ない、53年4月1日付で山崎正一教授(哲学科)から村上直教授(史学科)に替り、54年4月1日付で村上教授から小谷洋一教授(英文科)に替った。

研究所蔵書の紹介

法政大学発行の『法政』に連載中の「法政大学の蔵書紹介」は第10回(52年11月)・第11回(53年2・3月合併)に引き続き、12～14回分(53年4・5・9月)が能楽研究所蔵書の分で、西野春雄所員が般若窟文庫本や金春家旧蔵本などを紹介した。

竹本所員の受賞

兼任所員竹本幹夫氏は54年7月14日に第五回の「日本古典文学会賞」を受賞した。同賞は財団法人日本古典文学会が新進有為の学徒の日本古典文学研究を奨励、援助する目的で設定したもので、前年度にすぐれた業績をあげた満35歳以下の研究者に授賞されている。竹本所員は「天女舞の研究」(『能楽研究』第四号)と「シラバヤシ考」(『国文学研究』65集)の両論考によって三人の受賞者の一人に選ばれた。『日本古典文学会々報』74号によれば、〝近世初期以前の能楽関係資料を博捜し、複雑・多様な能楽伝書類の体系的把握と精細な分析や、個々の能の特色の把握を通して、能楽研究にすぐれた業績をあげておられる。とくに、技術的知識を要する演出史研究を、広義の能楽史研究とみごとに結びつけている点は、新しい分野を開拓したものとして高く評価できる〟ことが授賞理由であった。

科学研究費の交付

昭和54年度文部省科学研究費一般研究Cに出願していた「能の演出変遷に関する研究」(代表者表章。研究分担者西野春雄・片桐登・竹本幹夫)に対し、百万円の研究費が交付された。研究所員の共同研究であり、これによって京都市の観世流シテ方河村隆司氏御所蔵の実技関係の文書など多くの新資料の調査・撮影が進渉し、またモータードライヴを含む接写用のカメラ関係の機具一式を新調することができた。写真も機具も、研究所に帰属することになる。なおこの共同研究は三年計画であったが、研究費の交付が二年間に限定されたため、若干予定を変更し、55年度で一応のまとまりをつけることになった。

堀口康生氏の留学

53年4月から54年3月まで、大阪女子大学専任講師の堀口康生氏が、国内留学の主要研究機関として当研究所を指定され、資料の調査等にあたられた。後述するオニール博士を囲む研究会にも氏は出席しておられる。

オニール博士の留学

ロンドン大学東洋アフリカ学部教授で同学部日本学科長のP・G・オニール博士は、日本学術振興会外国人招へい研究者として来日され、53年9月から54年3月までの七ヶ月間、兼任所員の資格で能楽研究所に於いて研究に従事された。表所員と協力しての「初期日本演劇の歴史的発達と芸術論」が研究課題で、世阿弥能楽論英訳上の多くの問題点の解明が主たる目的であった。研究所では、オニール博士を囲み、所員(表・片桐・西野・竹本)と堀口

康生・小田幸子氏が出席して『風姿花伝』の輪読会を週に一度ずつ開き、全七篇を読破し、相互に得るところが多大であった。本誌本号に掲載したオニール氏の訳業はその頃すでに成っていたものである。留学期間中に、博士は、53年11月7日、私学会館での法政大学文学部主催の講演会で「ヨーロッパに於ける能楽研究」と題して日本語で講演され、また『法政』54年2・3月合併号に「ロンドン大学における日本学研究」と題する報告を寄せてもおられる。なお、オニール博士は昭和27年にはじめて来日された時から能楽研究所と縁が深く、40年・46年に来日の際も能楽研究所を研究の場としておられた。

香西精顧問の逝去と「香西文庫」の寄贈

当研究所顧問の香西精氏が、能界展望欄に記した如く、54年1月12日に死去された。戦後の世阿弥研究をリードして来られた氏の経歴や業績は観世寿夫記念法政大学能楽賞の授賞理由と重複するので記さないが、能楽研究所顧問を委嘱したのは38年9月のことである。32年5月に表所員が神戸に氏を訪問して以来、氏は上京のたびに研究所を訪れ、資料の調査や所員との討議に時のたつのを忘れておられたもので、顧問就任後は研究所の活動について助言を絶やされなかった。42年に眼を悪くされてからは上京なさることもなかったが、文通によって所員と研究上の討議を続け、研究意欲はいよいよ旺盛であった。50年7月から53年10月まで、表所員に宛てて毎週ハガキ一枚の小論文を送り続けたことは氏の研究への執念を示すものと言えよう。そのハガキ論文などを集成し、氏の喜寿を記念する第四論文集として出版すべく、表所員が編集に着手した直後に亡くなられたのである。

なお、香西氏の七七忌にあたって、御遺族から氏の蔵書約一千冊が能楽研究所へ寄贈された。研究所はそれを「香西文庫」と名づけ、一般にも公開することにしている。また、それへの謝礼の意味で、54年11月にわんや書店から刊行された香西氏の第四論文集『世子参究』の序(小西甚一)と付録(香西精略年譜・香西精著述目録・香西精氏の人と学問〔伊藤正義〕・編者あとがき〔表章〕・おわりに〔香西照夫〕)の部分を抜刷りした形の小冊子「香西精氏の経歴と業績」をわんや書店の諒承を得て作成し、香西氏の一周忌にあたって法要参列者等に配布した。

西尾実所員の逝去

当研究所設立以来の所員であった西尾実氏が、能界展望欄に記した如く、54年4月16日に死去した。大正8年に『信濃教育』に「初心不可忘」と題する一文を書いて以来、世阿弥能楽論に関する多くの論考を発表し続け、戦前にすでに世阿弥研究の泰斗としての地位を確立していた氏は、野上豊一郎博士が逝去された昭和25年当時は、国立国語研究所長が本務であったが、法政大学文学部にも兼任教授として出講していた。そうした関係で、野上前総長の功績を記念して能楽研究所を設立する話が起きた当時から、文学部長だった谷川徹三氏と西尾氏が、田中允前所員と共に企画に関与していた。27年4月に野上記念法政大学能楽研究所が発足してからは、実際には顧問格で日常の研究所業務には携わらなかったものの、谷川氏も西尾氏も所員として名を連ね、重要な決定をする所員会議には出席し、何かと助言を惜しまなかったのである。谷川氏は41年に法政大学を退いたため所員を辞して顧問になったが、西尾氏は法政大学を辞して名誉教授となってからも、従来通

り所員であり続けた。この間、昭和31年からの観世宗家所蔵文書調査の研究者グループ（表所員も参加）の責任者を勤め、その後の観世宗家と研究所の連携の道を拓いたことをはじめ、西尾氏の研究所に対する貢献は量り知れない。古川・表・片桐・西野の各所員が、あるいは学部や大学院の講義を通して指導を受け、あるいはお引き立てにあずかるなどして、西尾氏から個人的に恩恵を蒙った点も多い。香西顧問に続く西尾所員の逝去の打撃は大きいが、それを乗り越えていい仕事をすることによって、氏の研究所に対する貢献に報いる所存である。

〔受贈図書〕

単行本（受入順　＊印は寄贈者）

光悦書宗達金銀泥繪　研究編　＊朝日新聞社
謡曲・狂言集　古川久・小林責校注　＊明治書院
演劇年報一九七八年版　早稲田大学演劇博物館
法政大学史資料集　第一集　＊法政大学
鷺流狂言　＊文化庁文化財保護部無形文化民族文化課
寺院における舞楽の伝統と生命力　＊高橋美都　（私家版）
京都の田楽調査報告書　＊京都府教育委員会編　京都府
沖縄文化研究5　＊法政大学沖縄文化研究所
この道絶えずは　＊東京金剛会
義経の生涯　能楽義経像　＊田居尚　中央公論事業出版
芸能論考Ⅳ（芸能の科学9）　＊東京国立文化財研究所
能（日本庶民文化史料集成3）　芸能史研究会　＊三一書房
能謡100問100答　第二集　＊藤城継夫　わんや書店
佐渡の能舞台（写真集）　＊大石征勝　（私家版）
荒木村重史料（伊丹資料叢書4）　八木哲浩編　＊伊丹市役所
竹取物語・伊勢物語（図説日本の古典）　＊集英社
図録日本医事文化史料集成4　日本医史学会編　＊三一書房
未刊謡曲集30　＊田中允　古典文庫
観阿弥の芸流（三弥井選書4）　＊北川忠彦　三弥井書店
魂の呼び声　＊白洲正子　平凡社
謡曲講座　曲別篇（能楽選書）喜多実　＊能楽書林
白楽天山　福井秀一編　＊白楽天山保存会
祇園祭を支える力　高取正男他編　＊白楽天山保存会
中世文学　資料と論考（笠間叢書109）＊伊地知鐵男編　笠間書院
風姿花傳影印三種　＊表章・伊藤正義編　和泉書院
音盤目録Ⅲ　＊東京国立文化財研究所
佐渡の能舞台　＊若井三郎　（私家版）
観世　第46巻　観世編集部　＊檜　書店
謡曲講座　総説篇　喜多実　＊能楽書林
音楽資料探訪　＊音楽図書館協議会
演劇年報　一九七九年版　＊早稲田大学演劇博物館
法政大学史資料集　第二集　＊法政大学
梅津只圓翁伝（夢野久作著作集4）　＊葦書房
尾形光琳（日本を創った人びと19）　赤井達郎　＊平凡社
近松門左衛門（図説日本の古典16）　諏訪春雄　＊集英社
心より心に伝ふる花　観世寿夫　＊観世弘子　白水社
能の思想と芸術（能楽全書1）　野上豊一郎編修　＊東京創元社
初舞台七十年　＊大西信久　大西松風社

視聴覚資料目録3集　＊早稲田大学図書館
能の演出（能楽全書4）野上豊一郎編修　＊東京創元社
芸能論考Ⅴ（芸能の科学10）　＊東京国立文化財研究所（私家版）
新世阿弥論考　＊安田宗一
観世寿夫　至花の風姿　銕仙会編　＊平凡社
道　白洲正子　＊新潮社
世子参究　香西　精　＊香西昭夫　わんや書店
能楽の実技（能楽全書7）　野上豊一郎編修　＊東京創元社
京都の田遊び調査報告書　＊京都府教育委員会
壬生狂言　面・衣裳・小道具一覧表及び扮装写真集　＊壬生大念仏講
能楽史新考㈠　＊表　章　わんや書店
狂言百番（平凡社カラー新書122）＊小林責　平凡社
奈良市行政・市史・資料・文書所蔵目録　＊奈良市史編集室
能及狂言考　本田安次　＊能楽書林
日本文化の歴史6　熱田公編　＊小学館
謡曲曲名索引（参考書誌叢刊1）　＊国文学研究資料館
奈良のあゆみ　木村博一　＊奈良市役所
観世　46巻　観世編集部　＊檜書店
萬葉能　研究と創作　＊稲垣富雄　右文書院
De Kraanvogel en de schildpad　＊E. de Poorter
Nō et Kyôgen Printemps été　＊René Sieffert
Nō et Kyōgen automne hiver　＊René Sieffert

雑誌その他

青山語文　第8・9号　青山学院大学日本文学会
朝日ジャーナル第22巻1号　朝日新聞社
跡見学園国語科紀要　第26・27号　跡見学園
跡見学園短期大学紀要　第14・15号　跡見学園短期大学
跡見学園短期大学文科報　第5号　跡見学園短期大学
梅若　第227号～第237号（53・4～55・3）　梅若会
演劇研究　第9号　早稲田大学演劇博物館
解釈　第24巻6号　＊室山源三郎　教育出版センター
観昭　第9巻～第10巻（53・4～55・3）　観昭会館
観世　第45巻～第46巻（53・4～55・3）　檜書店
かんのう　第227号～第235号（53・8～55・3）大阪能楽観賞会
喜多　44年春・夏　45年新春・陽春・夏
喜多　53年春～54年冬　十四世六平太記念財団
きたぐに　第107号～第126号（53・5～54・12）　北国川柳社
橘香　第24巻～第25巻（53・4～55・3）　梅若研究会
拱星　第8号～第9号　拱星会
芸術新潮　第53巻7号　新潮社
芸能文化史　創刊号　芸能文化史研究会
神戸学院大学紀要　第1号～第9号　神戸学院大学教養部
国語国文学　第14号～第15号　東京学芸大学国語国文学会
国語国文学会誌　第22号　学習院大学国文学会
国語国文研究　第59号～第62号　北海道大学国文学会
国文学　第55号～第56号　関西大学国文学会
国文学―解釈と鑑賞　第43巻7号　＊西野春雄　至文堂

国文学研究　第65号～第66号　早大国文学会
国文学研究資料館報　第10号～第13号　国文学研究資料館
国文学論集　第12・13号　上智大学
国文目白　第18・19号　日本女子大学
国文論稿　第7号　岡山大学
駒沢短大国文　第8・9号　駒沢短期大学国文科研究室
金　剛　第102号～第107号　金剛雑誌会
写真試論　第1巻1号　劇書房
女子大国文　第82～86号　京都女子大学
女子大文学（国文篇）　第29・30号　大阪女子大学国文学研究室
書陵部紀要　第29号～第30号　宮内庁書陵部
信濃教育　第1116号　信濃教育会
新　劇　54年2月　白水社
人文学報　第132号　東京都立大学人文学部
人文学論集　第12・13号　仏教大学文学部学会
素　顔　第4号　山本安英の会
清　葉　第20号～第26号　清葉会
遂次刊行物目録　51年版　国立国会図会館
中央大学国文　第21号　中央大学国文学会
中世文学論叢　第3号　東京学芸大学
帝京大学文学部紀要　第11号　帝京大学文学部国文学科
銕　仙　第262号～第276号　銕仙会
伝統芸能　第273号～第296号　京都伝統芸能懇話会
東京金剛会能　54年1・2・3回　東京金剛会
東京女子体育大学紀要　第12号～第13号　東京女子体育大学

*表　章

同朋学園仏教文化研究所紀要　創刊号　同朋学園仏教文化研究所
能　53年4月～55年3月　観世能楽堂
能　53年4月～55年3月（239～262）　京都観世会館
能　54年6月～55年3月　水道橋能楽堂
能　能楽協会報　第22号　能楽協会
能　研究と評論　第8号　月曜会
能　別冊太陽　冬　53年　平凡社
能楽タイムズ　第313号～第336号（53・4～55・3）　能楽書林
能楽の友　第136号～第159号（53・4～55・3）　能楽の友社
能楽評論　第26号～第37号（53・4～55・3）　能楽評論
能楽連盟報　創刊号～第18号　新潟県能楽連盟
半どん　第77号　半どんの会
比較文学研究　第35号　東大比較文学会
仏教大学大学院研究紀要　第7号　仏教大学
仏教大学研究紀要　第63号　仏教大学
文芸論叢　第11号～第12号　大谷大学文芸研究会
文　林　第12号～第13号　松蔭女子学院大学
宝　生　第27巻～第28巻（53・4～55・3）　わんや書店
宝生記念誌　わんや書店
法政史学　第30号～第32号　法政大学史学会
法政史論　第5号～第6号　法政大学大学院日本史学
法政大学大学院紀要　創刊号～第3号　法政大学
法政大学遂次刊行物所蔵目録　法政大学
法政大学遂次刊行物所蔵目録　政府刊行物篇　法政大学
法政大学年誌　51年度・52年度　法政大学

法政大学文学部紀要　第23号～第25号　法政大学
宮城教育大学国語国文　第9・10号　宮城教育大学国語国文学会
みやび　創刊号～第7号　コミュニティサービスKK
山邊道　第22号～第23号　天理大学国語国文学会
歴史公論　第4巻4号・10号　＊西野春雄　雄山閣
わかめ　創刊号～第6号　耕春会
Art Life　2　アートライフ出版
Cornel University East Asia Papers　コーネル大学
SPAZIO　17　日本オリベッティKK

〔編集後記〕

今号は昨年度中に発行すべきものが遅延した分である。第六号を引続いて本年度中に発行すべく、準備を進めている。

表・後藤連名の論考は、類例を聞かぬ性質の考察であり、予想以上に長大なものとなった。次号収載予定の「下」の分は本号の半分以下の紙数に収まるであろう。P・G・オニール氏の翻訳は昨年春にすでに原稿を頂戴してあった。発行が遅れて氏に御迷惑をお掛けしたことを深くお詫びする。

能楽研究所は本年度末に麻布校舎から富士見校舎の図書館研究室棟に移転する。準備と整理のため56年1～4月は資料閲覧が不可能となるので、御留意いただきたい。本号が麻布校舎時代発行の最後の紀要となる可能性が強い。（表　章）

昭和五十五年十一月十日　発行

能楽研究　第五号

編集兼発行者　野上記念法政大学能楽研究所
106 東京都港区南麻布二―八―四
〇三―四五三―四〇二九
所長　矢内原　伊作
長野市川中島一八二二―一

印刷所　三和印刷株式会社